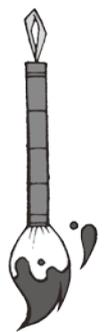


無常



下野市教育委員会 文化財課

阪神淡路大震災、東日本大震災、熊本地震、秋田県内陸南部地震、中越沖地震、長野県北部地震、三宅島、草津白根山、御嶽山、霧島山（新燃岳）、阿蘇山、桜島、箱根山の噴火、大阪北部地震、九州北部豪雨、広島豪雨、関東東北豪雨、豪雪、竜巻などの自然災害。すぐ筆者の頭に浮かぶ、平成時代30年間の災害です。資料をつぶさに確認すれば、ここに記

せていない幾つもの災害があります。もうこれ以上、平成という時代に災害の記録が増えてほしく無かったのですが、残念ながら西日本で大きな豪雨災害が起きてしまいました。謹んでお見舞い申し上げます。

正確な評価は後世の歴史学者にお願いしなければなりません。恐らく「平成」という時代は大きな災害に見舞われ続けた時代だったという評価が下されることと思います。いまさらながらですが、「平成」は、「国の内外、天地とも平和が達成される」ということを願った名前のはずでした。

東日本大震災や熊本地震に見舞われた際、これらの災害は平安時代の貞観年間（860年代）や仁和3年に起きた一連の災害とよく比較されました。貞観6年（864年）5月の

富士山の噴火、貞観11年（869年）の陸奥国地震・津波、貞観16年（874年）年の鹿兒島県開聞岳噴火などです。

仁和3年（887年）夏には、マグニチュード8.0〜8.5クラスの南海トラフ沿いの巨大地震があり、多数の犠牲者が出たことが記録されています。関東地方では、弘仁9年（818年）夏、M7.5以上、北陸では天長7年（830年）冬、「歴代以来、未だ聞くことあらず」と記された記録が残されています。近年の報道でも「未曾有の、これまでに経験したことのない、過去に例の無い・・・」などと表現されていますが、歴史が続く限りこの表現も続くのでしょうか。

水害の記録は地震や噴火に比べて少ないのですが、それでも畿内では古代・中世の水害の記録が幾つも残されています。大同元年（805年）8月、「この月霖雨止まず。洪流氾濫して、天下諸国多くその害を被る」と記されており、長雨だけでなく大きな洪水も発生したことがわかります。天慶元年（938年）6月「鴨河の水、京中に入り多く人・屋舎・雑物を損す。西堀河以西、海の如し。往還することあたわず」。延久5年（1073年）5月今月洪水。廿年来未曾有なり」と記され、た

びたび平安京が洪水に見舞われたことがわかります。白河法皇が「賀茂川の水と双六の賽山法師」が思うようにならないものとして例えたのもこの頃です。

この後、建暦2年（1212年）に鴨長明が自らの体験を通じて『方丈記』を記しました。この中で「五大災厄」として安元3年（1177年）の大火、治承4年（1180年）の大風、福原（兵庫県神戸市）の遷都、養和の飢饉（1181〜82年）、元暦II文治の大地震（1185年）をあげています。長明は人間の存在に対して「無常」をテーマに方丈記を記述しました。彼は文中に「さしも危うき京中の家」と記していますが、彼の目には京都という当時、最先端の都市があまりにも災害に対して脆弱で儂いものに写ったのでしょう。平安時代には災害が著しい場合や長引く場合、年号を改めてその影響から逃れようとした。災害改元といわれる行為です。平成も終わりを迎えます。新しい元号の下では、災害が無いことを祈ります。

参考文献 北原糸子編『日本災害事典』・『日本災害史』吉川弘文館